

Kin San が作った大砲と Ta Cih 型の船で、Yat Sun は再度 Moa Lok Sa を攻撃した。Yat Sun は戦死した。Demak で交替に関して騒動が起きた。マジャパヒトの Pa Bu Ta La はこの機会を誤用し、マジャパヒト王として Moa Lok Sa と中国の皇帝と連絡を取った。〈70〉

1521-1546 年

Yat Sun の兄弟の Tung Ka Lo が Demak のイスラム王になった。

1526 年

Kin San は既に老いたが、彼は中国語に堪能であったので、Sembung の華人たちを降伏させるために西に向かう Demak の艦隊に乗り組んだ。

1527 年

Pa Bu Ta La が死去した。Tung Ka Lo の息子の一人である Toh A Bo 将軍が Demak の軍でマジャパヒトの王宮を占領した。Pa Bu Ta La の息子たちはイスラムに入信する心の準備ができておらず、Pasuruan と Panarukan へ避難した。

1529 年

Kin San が 74 歳で死去した。遺体は Demak まで運ばれた。ムスリム、非ムスリムを問わずスマランのすべての住民が葬儀に参列した。

1529-1546 年

Tung Ka Lo の息子の Muk Ming が Kin San と交代した。

1541-1546 年

スマランの非ムスリム華人社会の援助を得て、一隻 400 人の兵士を乗せることができる大型ジャンク船を Muk Ming は 1000 艘も完成させた。Tung Ka Lo は東の海に浮かぶ香料諸島を奪うつもりでいた。スマランの非ムスリム華人社会は昼夜兼行で建造に尽力した。

1546 年

Tung Ka Lo は Demak の艦隊と共に東に向けて出撃した。Tung Ka Lo が死亡した。Muk Ming が Demak の王位についた。Ji Pang Kang の軍が Demak を奪った。Ji Pang Kang はまた Jin Bun の孫でもあった。Demak での骨肉の争いであった。モスクを除き町も王宮もすべて灰になってしまった。〈71〉

Muk Ming の軍は押されてスマランの造船所に立てこもった。Ji Pang kang の軍が取り囲んだ。廟とモスクを除き、造船所も含めてスマランの全市街は、とても粗暴な Ji Pang Kang の軍によって焼失した。Muk Ming が死去した。非ムスリム華人たちは大量虐殺に遭った。Muk Ming の息子の Ja Tek Su が王位に上り Demak のサルタンになったが、彼もまた暗殺された。

Ji Pang の軍は Peng King King の軍に攻撃された。Ji Pang Kang が死去した。Peng King King は内陸部にイスラム王国を建国した。海からは遠く船舶は必要なかった。

Jin Bun にはじまり 71 年間三世代にわたって Demak で支配した雲南華人の子孫たちのイスラム諸王の歴史はこれで終わる。Kin San, Yat Sun, Muk Ming 以外、スマランの造船所を再建しなかったのである。

第五節 Talang 廟からの中国語資料

Residen Poortman は警察の協力を得て Talang¹²の廟の家宅捜索を行った。その調査結果は次のとおりである

1415 年

孔子の子孫である Kung Wu Ping 提督が Gunung Jati の頂上に灯台の尖塔を建設した。その近くに Sembung, Sarindil, Talang というハナフィー派華人ムスリムの集落が形成された。その各々にはモスクが備わっていた。Sarindil 集落には船舶修理用のチーク材の生産が義務付けられていた。Talang 集落には港湾の維持管理が義務付けられていた。Sembung 集落には灯台の維持管理が義務付けられていた。このハナフィー派華人ムスリムの三つの集落とも明王朝の中国船への食糧供給が義務付けられていた。当時、Cirebon 付近は無人の土地であったが Cerme 山のふもとに位置する

¹² (訳)Cirebon 市内

故に大変土地が肥えていた。

1450-1475 年

東部と中部ジャワの北海岸とまったく同じように、Cirebon 地域のハナフィー派華人ムスリムの社会は、中国との連携が切れてしまったために、非常に寂れてしまった。ハナフィー派華人ムスリムがいなくなったため Sarindil のモスクは修行場となってしまった。Talang のモスクは孔子廟になってしまった。それとは反対に、Sembung のハナフィー派華人ムスリムの社会は繁栄しイスラムを堅持していた。

1526 年

Demak からのイスラム軍を乗せた艦隊が Talang 港¹³に投錨した。Kin San という名のインドネシア生まれで中国語が得意な華人が同行していた。Demak 軍の司令官 Syarif Hidayat Fatahillah は Kin San を伴って Talang から、Sembung のイマムである Tan Eng Hoat が修行を行っている Sarindil に行った。Tan Eng Hoat とともに Demak イスラム軍は平和裏に Sembung に入った。Demak のイスラム王の名で Demak 軍司令官は Sembung のイスラム法学者である Tan Eng Hoat に称号を贈った。それは Mu La Na Fu Di Li Ha Na Fi と読める、Demak 軍は船に戻り西に向かって帆をあげた。Kin San は一か月間にわたって Tan Eng Hoat の客人であった。

1552 年

Demak 軍司令官はその四半世紀後に Sembung を訪れた。軍隊は連れずに単身であった。Tan Eng Hoat は大変不思議がった。Demak 軍の司令官が Banten の元イスラム王であったと聞いていたからであった。彼は Demak の Jin Bun の子孫に対する造船所での大量殺りくの話聞いて失望した。Pajang サルタン国では Syi'ha 派のイスラムが強い影響力を持っていたため、彼は Pajang のサルタンに従いたくなかったのである。Demak 軍の元指令官は一生ずっと Sarindil で修行を続けることを希望すると申したのだった。〈73〉

Tan Eng Hoat は Sembung の華人ムスリム社会は四世代にわたってイスラムの雲南と連絡がないと話した。それに反し、Sembung の華人たちは Cirebon 地域で極めて強

¹³ (訳) チレボン港

力になった非イスラムの福建人の子孫になった。Tan Eng Hoat 自身、そのわずかな部分がイスラムに入信しただけの福建人の子孫であった。

Tan Eng Hoat は元 Demak 軍司令官に、Sembung の華人ムスリムたちに昔 Jin Bun が Demak でやったようなサルタン国を建国する指導を依頼した。Sembung の華人社会がイスラムで存在していただけるようにするために他の道がなかったからであった。Demak でのようにやむを得ず中国語とハナフィー派を手放すとしてでもである。年老いたとはいえ Demak 軍司令官はそれに賛同した。

1552-1570 年

Sembung の華人ムスリム社会の協力を得て元 Demak 軍司令官は、現在 Kasepuhan となっている王宮にその中心を置いた Cirebon サルタン国を建国した。Sembung の住民は村ごとイスラムやインドネシアの名前を付けて Cirebon の新しい町に移住したのであった。Cirebon の初代サルタンは当然のこと元 Demak 軍司令官であった。かれは元 Sembung 住民からイスラム軍を編成した。非イスラム華人はやむを得ず新たに編成されたこの Cirebon 華人イスラム軍に従ったのであった。

1553 年

この新しい Cirebon サルタン国に王妃が存在するように、すでに年老いてはいたが初代の Cirebon のサルタンは Tag Eng Hoat、別名 Maulana Ifdil Hanafi の娘と結婚した。Sembung から Cirebon の王宮までこの華人の姫は三保大人当時の中国皇帝の結婚式のように盛大な儀式を以て出発した。〈74〉Tan Sam Cai というまだ若い甥に護られていた。この人こそが San Cai で Residen Poortman の調査で探していた人であった。

1553-1564 年

太守 Wirasenjaya 王子を称した Tan Eng Hoat 別名 Maulana Ifdil Hanafi は Cirebon サルタン国の太守となり、(1553-1564)法律上ではインド洋まで支配することになっていたが、事実上は Kadipaten 近くに任じられていた。そこから彼は極めて大きな業績である東 Priangan の内部地域から Garut までの地域においてスンダ語でイスラム Syafi'i 派を発展させたのであった。

1564 年

Tan Eng Hoat がヒンドゥー教を奉じている Galuh 王国への遠征中に死去した。Tan Eng Hoat の遺体は Garut のとある湖にある島に埋葬された。

1569-1585 年

Tumenggung Aria Dipa Wiracula の称号を持ち、Muhammad syafi'i という名前をつつかうのを一度も好まなかった Tan Sam Cai は Cirebon サルタン国の財務大臣に就任した。Tan Sam Cai は背教者であった。彼は Talang 廟に詣でて線香を燃やすことに執着した。このようであっても Tan Sam Cai は財政的に Cirebon サルタン国が自立できるまでに強くしたという大きな業績があった。さらに Tan Sam Cai はトルコのサルタンのように、Sunjaragi 宮殿というハレムも建てたのだった。

1570 年

初代の Cirebon のサルタンが死去し、華人女性から生まれたその息子が跡を継いだ。Cirebon のサルタンの二代目は大変若い青年であったので、Tan Sam Cai が事実上 Cirebon サルタン国を支配したことになる。この強力な Tan Sam Cai に対抗したのは Kung Sem Pak 別名 Muhammad Murjani で、サルタンの墓守となった Kung Wu Ping 提督の子孫であり Sembung に住んでいた。

1585 年

Tan Sam Cai は Sunjaragi ハーレムで毒を飲まされて死亡。遺体は Sembung の Cirebon サルタン国支配者たちの墓守である Kung Sem Pak により埋葬が拒否された。豪雨の中 Cirebon に戻らざるを得なかった。その妻 Nurleila binti Abdullah Nazir Loa Sek Cong の要請で Tan Sam Cai の遺体は自宅の屋敷内にイスラム式で埋葬された。

かれはイスラム式で埋葬されたとはいえ、非イスラム華人の要請で Tan Sam Cai の火葬のための昇天祭が Talang 廟で行われた。その名は Talang 廟に永遠に保管されるべく赤い紙のうえに漢字で書かれていた。Tan Sam Cai は Sam Cai Kong の名で神格化された英雄になった。祈りをささげる信心深い人になったが、彼の場合には線香を燃やすことで祈祷は十分であった。

以上は、マジャパヒト王国の衰亡とジャワで最初に始まったイスラム国としての Deman と Cirebon サルタン国の形成に関する歴史を書こうとするのに大変重要なスマランの三保洞廟と Cirebon の Talang 廟から得た知見である。

第六節 ポルトガルの資料

1511 年以來マラッカ港町はポルトガル人たちによって占領されていた。マラッカのポルトガル人の多くはジャワ人たちとの交易関係を締結しジャワ海岸沿岸の海上輸送の仕事を行っていた。彼らはジャワ島北海岸の港湾都市を何回も訪問した。〈76〉これから、彼らはジャワの港湾都市の現状について豊富な知識を持っていた。これ以外には、ジャワ商人たちも多数マラッカを訪れ、その中にはマラッカに居住するものも多かった。ポルトガル人たちの多くはこのジャワ商人からジャワの現況や歴史に関して聞かされた。ポルトガル人たちはマジャパヒト王国の発展の歴史を直接知らなくても、かれらはマラッカの町のみならずジャワの海岸沿いの港湾都市に居住しているジャワ商人からマジャパヒト王国に関する知識を得ていた。

マジャパヒト王国の滅亡はそれほど昔に起きたことではなかったもので、その記憶はまだ新鮮であった。Demak イスラム国の建国はその途上にあつた。ポルトガル人たちは Demak イスラム国のまだ発展の初期段階を経験したのであつた。ジャワ島に関して彼らが知りえたことを彼らは記録した。この記録はジャワ島に関して、Demak イスラム



15世紀、16世紀におけるジャワでのイスラム拡大地図

国の登場に関する歴史を書こうと注意を引くポルトガルの歴史資料となった。この

ポルトガルの資料からのデータは史実を知るためにふりいにかけて他の資料と突き合わせて合致させることが必要である。

〈78〉Tomé Pires は 1468 年生まれのポルトガル人で薬品の専門家であった。1511 年の暮れにかれはマラッカに向けて出帆し 1512 年の初めに目的地に到着した。1513 年の 3 月から 6 月まで Tomé Pires は監査役としてかつポルトガル商館の副館



長としてジャワの北海岸の探検を学んだ。彼は 1515 年の初頭までマラッカに滞在しており、自分の目で見たもののみならず人から聞いたことまでマラッカで得られる全ての情報を収集しようとした。集められたすべてのデータは Suma Oriental¹⁴という本に書かれた。この Tomé Pires の業績は、Armando Cortesao によって英訳・出版された後の 1944 年になって初めて知られるようになった。Tomé Pires の手書きの本はパリで Bibliothèque de la Chambre des Députés

の中にあるのが再発見された。

マラッカで Tomé Pires はポルトガル商館の副館長になり、薬品の専門家から歴史の著述家に鞍替えした。書かれた歴史の著作は Suma Oriental である。1515 年の初めに彼はマラッカを後にしてポルトガルに帰国するためにゴアに向かった。Tomé Pires はその後、中国へ行くように命令を受けたが、これは失敗に終わった。彼は中国への途上で捕まり Sampitai 刑務所に収監された。1540 年彼は捕囚として死去した。

Tomé Pires より有名なポルトガル人の歴史著述家は Barros である。De Barros はアジアでのポルトガル人たちの活動の歴史の分野での公式な著述家になり、リスボン

¹⁴ The Suma Oriental of Tomé Pires, Hakluyt Society Second Series, nos LPXXIX と XC, London 1944. その後に関しては R.A. Kern の論文 Pati Unus eb Sunda と B.K.I 108 の 124-171 ページの H.J. Graaf の論文 Tomé Pires "Suma Oriental en het tijdperk van godsdientovergang op Java"を参照されたし。

に収納されている史料を用いるための広い機会を持っていた。この分野での彼の作品は Da Asia と名付けられている。Da Asia はヨーロッパ人の専門家による初めてのアジアに関する著作と考えられている。それ故、Da Asia は過去数世紀にわたりアジア大陸で起きた出来事に関して知りたいと望む種々の人種からなる専門家たちによってたくさん利用されてきた。Da Asia は大変有名である。この作品は 1777-1778 年に再版された。第一部から第三部までが Barros 自身によって書かれたもので第四部は Barros が書いたものを下敷きにして Lavanha によって書かれたものである。De Barros の業績は Couto によって引き継がれた。

オランダの専門家の G.P. Rouffuaer は Wanneer is Majapahit gevallen?¹⁵(マジャパヒトはいつ没落したか)という題の論文のために Da Asia を利用した。この Rouffuaer の論文はマジャパヒトの衰亡を検討したオランダ人専門家による初めての業績であった。その当時存在した史料は Babad Tanah Jawi であった。この本の出版時にはマジャパヒトに関する原歴史資料がそれほど多くなかった。当時存在した史料は Meinsma から出版された Babad Tanah Jawi、いくつかの手書きの年代記、Brandes が出版したパララトンであった。ナガラクレタガマはまだ知られていなかった。G.P. Rouffuaer は Pati Unus がマジャパヒトの王であると述べた Pigaffeta の発表に対する意見に同調していた。この記録は Timor 島で作られたものであった。Rouffuaer は Adipati Unus がマジャパヒト王の Prabu Udara を打ち負かした後、1518 年から 1521 年まで王位についていたという結論を引き寄せた。マジャパヒト王国の滅亡は 1518 年だと推定される。Adipati Unus は 1518 年から 1521 年まで治世を敷いたのだった。

Krom はこの Rouffuaer の結論に対して非常に慎重な態度をとり、この説を大変疑っていた。¹⁶伝統的ですがすでに常識化しているマジャパヒト王国滅亡の年号は 1478 年である。Krom は Rouffuaer の結論よりこの伝統的な年号を採用する方を選んだ。〈80〉

また、故 Husein Jayaningrat 教授は歴史著作の Da Asia を、1913 年に出版した補足論文 Critische beschouwing van de Sejarah Banten「バンテン史に対する批判的配慮」に利用した。ポルトガルの専門家による他の歴史著述には Lopez de Castanheda の著作 Historia do descobrimento e conquista da India「インドの発見と征服の歴史」

¹⁵ B..K.I. VI, 111-199 ページ、1899 年発行

¹⁶ W.F. Stapel, Geschiedenis van Nederlandsch Indie, 295, 298 ページ

がある。

上記のポルトガルの歴史家の業績は過去数世紀におけるアジア大陸に移民してきたポルトガル人たちの行動を知るために極めて重要である。この業績はアジア大陸におけるポルトガル人の歴史を書くうえで有用である。私はアジア大陸におけるポルトガル人移民の歴史を書くつもりはなく、マジャパヒト末期と Demak イスラム国の発展初期について明確にしたいと思っているので、その時代に関連を有する一部分だけを引用し必要に応じて検討する。この引用と検討も次章の「歴史上の人物の特定」で実施することにする。

訳出終了 2015/8/24

